

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-8

麻里子は、十年前有志数名が発起人となって、地域おこしの一環として制作されたオリジナル舞曲『信州さらしな月の里唄』についての経緯から始めて、今夜の踊りを止めたのは、自らの本心によるからで、変に気を回さないでほしいという辺りまでを、この際通常モードの言葉付きに転換させ、過不足なく伝えなければと独り合点して、歴史的背景から説明しだした。

平安時代に編まれた『大和物語』の中に、能〈姨捨〉の題材にもなっている〈我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て〉と詠われる現長野県千曲市の姨捨の月は、江戸の俳人松尾芭蕉も、尾張から木曾路を経て猿ヶ馬場峠を越えた折、小紀行文『更科紀行』で〈倂や姨ひとり泣く月の友〉と詠んでいる……とか、この俳句を刻んである句碑は、今日あなたが降りた日本三大車窓の一つJR篠ノ井線姨捨駅の近くにある古刹〈長楽寺〉に建立されている……とか、また姨捨の月は、京都市嵯峨の大覚寺大沢の池、滋賀県大津市の石山寺の秋月と並んで日本三大名月とも言われたとか、日本棚田百選に認定された姨捨の棚田は、田の一枚一枚に月が映る田毎の月で有名だとかを事細かに話して聞かせた。

それからまた、今年で二十五回目を迎える千曲市観光協会主催の年中行事〈おぼすて観月祭〉が、全国俳句大会と銘打って作品を募り、著名な俳人をゲストに招いての審査や記念講演やら入賞記念句碑除幕式やら棚田米で作るおにぎりの無料配布やらを実施してきた推移の途上で、姨捨の月を取り巻くエリアを中心に、それ以外の名所旧跡を四季の移り変わりに織り込んだオリジナル舞曲『信州さらしな月の里唄』が生まれた流れを、もちろん姨捨駅に真紀が降り立ってから体感した多様な趣も引き合いに出して話し終えた。

麻里子は手酌でグラスに酒を注ぐと、一気に飲み干してから、「貞子さんも発起人の一人です」と言って微笑んだ。

「それでは、なおさら踊らなければ。ねえ、私の事は構わずに……」

今、麻里子が話してくれたあらましを、真紀は昌幸から聞き知っていたけれど、その事はおくびにも出さないで、軽くたしなめた。

「十年頑張ったから、踊り手は大勢いるの。今夜は二人とも見物人。それより、もう、おなかペコペコ?」

麻里子はいとも無頓着に、ゆるワードに戻して放言した。